

令和二年こどもの日に

はじめ爺から孫たちへ

新型コロナウイルスものがたり

コビットくんのたび



第1話 コビットくんの生い立ち

ぼくはコロナウイルスのコビットくんです。

地球温暖化のせいで、緑ゆたかな山々は森林火災で何日も、何日も、燃え続け、さらに、風水害・津波と、地球上では異常気象が続いています。

すみかを失ったコビットくんは、さまよい歩いていました。今晚のねぐらを探していたところ、町外れの山の中に洞窟を見つけました。

真っ暗な洞窟のなかに、天井からぶら下がり、目だけ光らせて、手まねきしているたくさんのこうもりが住んでいました。

コビットくんは、虫眼鏡でも見えないくらいの小さい生きものなので、誰も気づきませんが、こうもりにはよく見えました。

こうもりたちは、おびえるコビットくんを羽の奥深くに抱きかかえ、お腹いっぱいになるまでたくさんのご馳走を振舞いました。

ある日、長老のこうもりが、コビットくんに言いました。
じつは、最近人間たちが網を持って洞窟に入ってきて、メ
ンバーのこうもりを捕まえては、町の市場で高値をつけて
売っている。

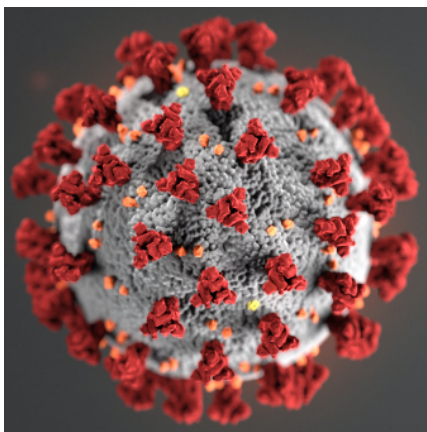
困った。困った。となげき悲しんでいました。

コビットくんは、こうもりへの恩返しを申し出ました。

コビットくんは、二十面体の、表面には光り輝く美しい突起を持つ、まるでルビーのような「すがた」をしています。

「よし、ひとつ人間を懲（こ）らしめてやりましょう」と

立ち上がりました。



こうもりにくつついて町の市場に着くと、コビットくんの仲間もすでに集まっていました。

コビットくんの仲間は、商人の手から、つぎからつぎへとお客さんの手にわたりました。

人間の体に入った仲間は、増え続けました。人間が、バス・電車・飛行機で移動すると、コビットくんの仲間もいっしょに、どこまでもついて行きました。

まるで、インターネットで運ばれるように、世界の隅々まであつという間に移動できました。

コビットくんの仲間が住みはじめると、苦しみ出す人間を見ていた、こうもりの長老が、「もうこれくらいでよからう」とコビットくんに話しかけました。

コビットくんは、「人間が自分たちの行いを反省し、自然を破壊するのをやめ、全ての生きものが安心して住める地球を取り戻すまで、懲（こ）らしめねばなりません。」と答えました。

薫風（くんぷう）に

忍ぶコロナは

いま何処（いずこ）



第2話　コビットくんの兄と姉

コビットくんには、年の離れたサーズ兄さんとマーズ姉さんがいます。

どちらもコロナ家に生まれたウイルス族ですが、よく見ると、「すがた」や性格は、かなりちがいます。

共通していえるのは、初めて出会った、気にくわない人間には、すぐに意地悪をしてしまうクセがあることです。

コビットくんには、たくさんのいところがあります。

いところは、みんな優しい性格の持ち主で、人間と仲良く暮らしていますので、人間は気づかないようです。

冬場になると、疲れた人間を見つけると、ちよつとだけ住みつきませんが、決してひどい目に合わせたりはしません。

サーズ兄さん

サーズ兄さんは、コビットくんと同じように、こうもりに連れられて、十七年前の秋、中国広東省にやってきました。

サーズ兄さんは、コビットくんとちがって、たいへん
性が激しく、新しいすみかを見つけると、すぐにたくさん
の仲間を人間の肺に送り込み、息苦しくさせてしまう乱暴
ものでした。

サーズ兄さんは、「スーパー・スプレッダー」と呼ばれる
人間が大好きです。

「スーパー・スプレッダー」とは、自分がウイルスに掛か
ると、まわりのたくさんの人々にウイルスをばらまく人間
を言います。

「スーパー・スプレッダー」は、香港やシンガポール、アメリカの高級ホテルに泊まり、つぎつぎと仲間をばらまきました。

サーズ兄さんと仲間は、東アジア地域の国々で猛威（もうい）をふるいました。

島国の日本には、入り口での検問が厳しすぎ、上陸できませんでした。

サーズ兄さんは、その手口があまりにも荒っぽすぎたので、WHO（世界保健機構）から、サーズ・コブという名前

で指名手配され、二年足らずで捕まってしまうました。

マーズ姉さん

マーズ姉さんは、八年ほど前に、アラビア半島の砂漠の真ん中に降り立ち、ヒトコブラクダと仲良く生活していました。

何日も、何日も、砂漠をラクダに乗って移動しました。時には、砂嵐に出会い、吹き飛ばされないように必死にラクダのコブにしがみついていたました。

ラクダ使いのおじさんたちは、うまくラクダを操り、風のない道を選んでくれました。マーズ姉さんはラクダ使いのおじさんたちとも仲良しになりました。

マーズ姉さんは、仲間がラクダ使いの体にまちがって入っても、大病にならないように、ラクダ使いの体の中に、「抗体（こうたい）」という親衛隊を送り込みました。



近頃は、アラビア半島の砂漠に観光にくる人が増えていきます。観光客は、仕事でもないのに、遠慮なくラクダの背中に乗ってきます。

マーズ姉さんが住んでいるヒトコブラクダは、気が弱く、失礼なお客さんにも「ノー」と言いません。マーズ姉さんは、ラクダがあまりにもかわいそうになり、そのような人間を懲らしめることもあります。

あるとき、中東の旅に来ていた韓国人が、マーズ姉さんの仲間を韓国に連れてかえりました。

その韓国人は、よもや自分にマーズ姉さんの仲間が住み
ついているとも知らず、つぎからつぎへと病院のはしごを
しました。行った先々の病院で、お医者さんや看護師さ
ん、他の患者さんにうつしまわったのです。

韓国では、入院すると多くの見舞客や患者の家族が病室
を訪れてくる習慣がありますので、マーズ姉さんの仲間は
苦勞せず、新しいすみかを見つけることができました。

しばらくすると、病気がマーズ姉さんの仲間のしわざで
あることがバレてしまい、早々に退散しました。

マーズ姉さんは、ごく少数の仲間と、ヒトコブラクダの背に乗って、ゆうゆうとアラビア砂漠の旅を今も続けています。



第3話 コビットくんの作戦

コビットくんは、サーズ兄さんのような腕力はないし、マーズ姉さんのように人づき合いも上手ではありません。

「すがた」は、兄や姉と同じく美しいのですが、性格は根っからの恥ずかしがり屋さんです。

仲良しのこうもりと一緒に街に出ても、誰にも気づかれず、静かに暮らしていました。

秋も深まり、コビットくんたちの出番がやってきました。

サーズ兄さんができなかつたコビット・ファンクラブ支部を世界各地につくることにしました。

コビットくんには、サーズ兄さんのような腕力がないので、「忍びの術」を用いて、人間が油断しているすきに、一気に攻める作戦をとることにしました。

コビットくんの「忍びの術」

コビットくんは、つぎの3つの作戦を立てました。

「作戦1」、人間に気づかれぬうちにメンバーを増やし、

運び屋を見つけて世界の隅々まで、メンバーを送りこむこと。

「作戦2」、人間に見つかりそうになったら、速やかに「すがた」を変えること、

「作戦3」、それぞれの支部でメンバーの数が目標に達したなら、一気に攻め立てること。

むかしは、ウイルス族は、あまりに小さいので、人間の目では見えず、気づかれることはありませんでした。

ところが、最近では、PCR検査を手に入れた人間は、ウ

イルス族を機械に放り込み、無理やり数を増やして、見つけ出す術を手に入れたのです。要注意です。

コビットくんの出番

コビットくんは、中国武漢の本部から、アジアの国々、イタリア・イギリスなどのヨーロッパの国々、アメリカ大陸、オーストラリア大陸と、世界中の支部に優秀なメンバーを送りこみました。

メンバーたちが入り込んでいても、インフルエンザや「か

ぜ」と思い、見逃してくれましたので、十二月の半ばには、もう配備が完了しました。

年が明けると、サーズ兄さんを捕まえた中国や香港、シンガポールといったアジアの学者たちが、コビットくんたちの存在にようやく気づき始めたようです。

しかし、中国のお役人たちは、コビットくんたちがわざとおとなしく振舞っているとも知らず、気にかけていません。

いよいよ戦闘開始

中国では、旧正月に合わせて、春節というお祭りが一月末から始まります。

中国人がお祭り気分で浮かれているすきに、攻めることにしました。

大きなテーブルを囲んでの大宴会が町中のレストランで繰り広げられていました。

各テーブルでは、コビットくんのメンバーが潜んでいるとも知らず、大声で叫んだり、歌ったりの大騒ぎです。

あつという間に、人間への乗り移りに成功しました。

熱を出したり、咳が止まらなくなったり、下痢をしたり、中には息苦しくなり、呼吸ができなくなった患者さんたちが、連日のように病院に運びこまれました。

中国武漢市がロックダウン（都市封鎖）を

あまりの患者の多さに驚いた政府のお役人は、あわててロックダウンを宣言しました。

人と人が近づくと、コビットくんのメンバーがとびまわ

るのを防ぐためです。

人どうしが近づき、咳をし、話をするたびに飛び出すしぶきに乗って、メンバーが周りに飛び散るのを防ごうと、みんな大きなマスクをつけて、用心しました。

武漢市では、二月八日から二か月半にわたって家から出るのが禁止されました。

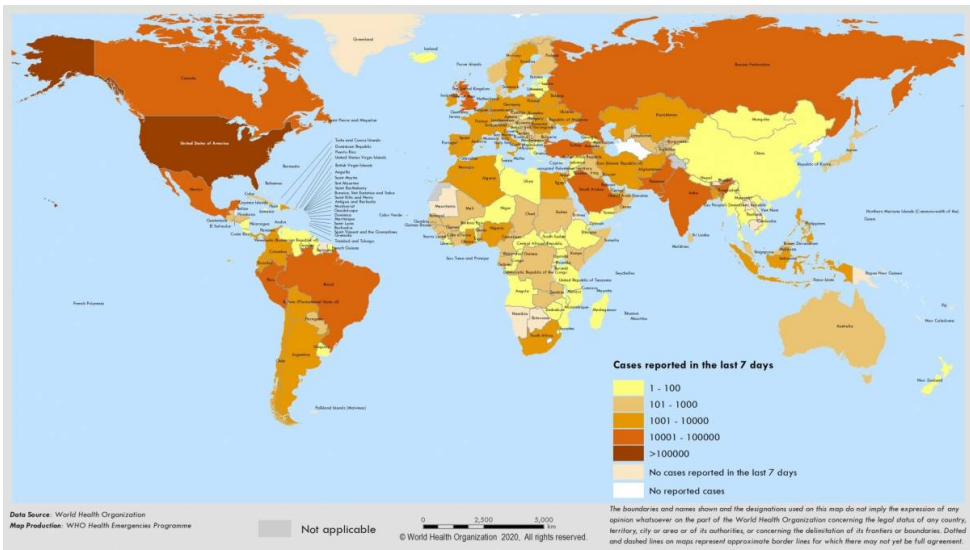
その間、ずっと休校が続いています。

コビットくんは子どもを大切にしていましたから、子ども

もの体には入り込まないように、たとえ入っても決して暴れまわらないように、メンバーに伝えていました。

ところが、学校がお休みとなり、お友だちと遊べず、公園にも行けなくなりました。

コビットくんは、首をうなだれて言いました。「これはぼくの大きな作戦ミス。申し訳ない」と。



第4話　コビットくん、世界の旅へ

中国武漢での戦いで、コビットくんたちは人間を大混乱させることに成功しました。しかし、自分たちの正体が少し見破られたようです。

コビットくんが一番苦手なのは「ワクチン」です。ウイルス族が、人間の体に入り込んでも、「ワクチン」をちよつと注射すると、動けなくなる恐ろしい「おくすり」です。

その完成までに、少なくともあと二年はかかるという話

を耳にしました。まずは、ひと安心です。

コビットくんは、「地球は人類だけのもの」と、考えちが
いしている人間どもを懲らしめるため、「世界の旅」へ出か
けることにしました。

ロンバルディアを目指せ

コビットくんは、つぎのターゲットをイタリア・ロンバルディア州と決めました。

ロンバルディア州には、イタリアで二番目に大きな町ミラノ市があります。

ミラノ市には、大聖堂（ドゥオーモ）やオペラ座など、いまから五百年以上まえに建てられたたいへん美しい建物が立ち並んでいます。

でも、いまでは毎日たくさんの車が町中を走り、この美

しかつた町にも、どんよりした空気がただよっています。



正体を見破られたコビットくんとメンバーは、少し「す

がた」を変えることにしました。

変身したメンバーたちが、中国人観光客にかくれて、イタリア北西部のロンバルディアの空港に、つぎつぎと送り込まれていました。

最後に送り込もうとしたメンバーのひとりだが、いつものように中国人観光客にかくれて空港から出ようとしたところを、検疫官（けんえきかん）に見つかってしまいました。

このメンバーは、自分が変身でパワーアップしたことをつい忘れ、観光客の体に入るとすぐに、前と同じようにアクセルを踏んでしまいました。

そのパワーのすごさで、メンバーが入り込んでいた観光客は、我慢できず、飛行機の中で発熱したようです。

コビッドくんのメンバーを見つけたイタリア政府のお役人は、さっそく緊急事態宣言を出しました。中国からの飛行機の乗り入れも中止しました。

たくさんのメンバーたちが、ミラノの街にすでに忍び込んでいるとも知らずに、お役人は、自信満々に、こぶしをふり上げ、テレビに向かって言いました。「もうこれで安心

だ」と。

気を許したイタリア人は、赤ワインの入ったグラスを手に、ピザをほおばり、夜遅くまで大声で歌っていました。

コビットくんのメンバーは、あつという間に、ミラノの町中に広がっていきました。

華麗に変身したコビットくん

新しく変身したコビットくんたちは、これまでよりもず

つと強い毒を持っており、メンバーにおそわれたイタリア人は、高い熱とせきで苦しみました。

呼吸ができなくなり、たくさんのお年寄りがなくなりました。病院のお医者さんや看護婦さんたちの体にも、もぐり込みました。どの病院も大混乱となりました。

ある日の夕方、美しい女性バイオリニストが病院の屋上から、医療者への感謝と患者さんへの励ましにと、「アベ・マリア」を演奏していました。

そのうしろには、これまでに見たことのなかった美しく

輝いた夕日が、ミラノの歴史的な建物を照らしていました。

コビットくんは、ヨーロッパの国々での支部づくりに、優秀なメンバーをつぎつぎと送りこみました。



アメリカ大陸への旅

コビットくんは、中国武漢での戦いを始める前に、アメリカのようすを探りにいくことにしました。飛行機に乗って太平洋をわたり、はるばるロサンジェルス町にやってきました。

今日はクリスマス・イブです。町のいたるところにクリスマス・ツリーが飾られ、ジングルベルの曲が流れています。

今回の旅の目的は、CDCの動きを探ることです。

「CDC」は、世界で最もすぐれたアメリカにある病気予防研究センターです。いつもウイルス族に目を光らせています。

遠い親戚であるエイズウイルスやエボラ出血熱ウイルスの正体をあばいたのも、CDCの研究者です。コビットくんの最大のライバルです。

アメリカではインフルエンザが大流行

この秋から、アメリカではインフルエンザが大流行して
いました。たくさんの方がインフルエンザで死亡しており、
CDCはインフルエンザ・ウイルスに気をとられて、コビツ
トくんたちには無関心のようです。

コビットくんは、ディズニールランドでアメリカ人の子どもたちと仲良く遊んでから、支部のメンバーに仕事をまかせ、いったん生まれ故郷の中国に帰ることにしました。

コビットくんが帰国した後も、支部のメンバーは増え続けました。

アメリカでの作戦開始

CDCは、中国やイタリアで、コビットくんたちがあばれまわり、たくさんの死者が出ていることを、よく知っていました。

しかし、何人ものアメリカ人が熱を出し、せきをしていても、それがインフルエンザの症状とあまりにもよく似て

いたので、コビットくんたちのしわざとは気づきませんでした。

コビットくん、ふたたびアメリカへ飛ぶ

中国とイタリアで大勝利をあげたコビットくんは、一番の難敵 CDC のいるアメリカにもどり、いよいよ作戦開始です。

コビットくんの号令で、支部のメンバーたちはいつせいに、陽気なアメリカ人におそいかかりました。町ではメン

バーにやられた人たちがつきつきと病院に担ぎ込まれていきます。

ロサンジェルスでの勝利を確信したコビットくんは、緊急事態宣言で飛行機が飛ばなくなる前に、急いでニューヨークへと向かっていました。

いよいよニューヨークでの戦い

コビットくんは、ロサンジェルスからニューヨークに向

かう飛行機の中では、「H」企業の会長の体にひそんでいました。会長は一睡もせず、「コロナ対策よりも経済回復」の記事ばかり読んでいました。

ニューヨークの空港に着くと、中国の武漢本部、イタリア支部、ヨーロッパ支部、ロサンゼルス支部と各地から派遣されてきたメンバーと落ち合いました。

どのメンバーも各地で大勝利を収めていましたので、疲れた様子もなく、自信に満ちあふれています。

アメリカのお役人たちは、中国やヨーロッパで、これだけ多くの死者が出ているのに、いまだに「景気が第一」をスローガンにしています。

コビットくんたちが働くには好都合です。

トランプ大統領が国家非常事態宣言

毎日、毎日、病院に運び込まれる人の多さに、たまりかねたアメリカのトランプ大統領は、ついに、三月十七日に

国家非常事態宣言を出しました。

ニューヨーク州のクオモ知事は、不要不急の外出を禁止し、ついにニューヨークの町をロックダウン（都市封鎖）しました。

子どもたちの学校も休校です。いつもはたくさんの人出でにぎわうブロードウェイも、通りからは人が消え、死の町となりました。

アメリカのお役人たちは、コビットくんたちをなめてかかっていました。

都市を封鎖さえすれば、コビットくんたちが働けなくな

り、あわててアメリカから出ていくだろうと考えていたの
です。



ニューヨークでの大勝利

これは、コビットくんのメンバーの増えかたです。最初の日には、メンバー1人から新しいメンバーが2人生まれます。2日すると4人に、3日で8人、4日で16人、5日で32人、6日で64人、7日で128人、なんと1週間で、ひとりのメンバーから百人以上の新しいメンバーが生まれます。

国家非常事態宣言が出た時には、メンバーが忍びこんだ

アメリカ人は一日に百人足らずでしたが、一週間後には百倍の一万八千人近い人間の体に、新たなメンバーが住みつき、攻撃しました。

ニューヨークでは、あまりにもたくさんの方が死んでいくので、お葬式もできなくなっていました。

ニューヨーク州のクオモ知事は、毎日のように市民に外出自粛をお願いし続けていますが、恐れずにしっかりと働くようにと言いまわるお役人もいます。

コビットくんたちは、「クオモ知事のようなお役人ばかりだと、自分たちの方が先に死んじゃうけれど、まだしばらくはぼくたちの時代だね」と、話し合っていました。

自信満々に右手にトーチを掲げている自由の女神も、このところ心なしか、うつむき加減です。



いつもは強気のトランプ大統領も、コビットくんのパワーのすごさが少しずつつわかりかけてきたようです。コビットくんにはミサイル兵器も、ドル紙幣も通用しないことも。

これまでに、アメリカ全土で、百二十万人以上の人が新型コロナウイルスにかかり、七万七千人もの人が死亡しています（五月十日現在）。

この数字をみて、コビットくんは、言いました。

「こんな戦いはもうしたくない。でも、「自分が一番だ」と考えている人間がもつ核兵器は、もっと恐ろしい。

ウイルスは、地球を破滅させたりはしない」と。

そして、猛暑の中での戦いは苦手だから、秋まで小休止だと、メンバーに告げました。（おわり）

お外に出たときに、手洗いとマスクをして、2メートル離れて遊べば、コビットくんを心配しなくていいよ。

仲良くしようね。

つづきは、秋までのお楽しみ

